

天明元	一八一	八高標	五月城中に文庫を造る云々
享和三	一八〇三	北高敏	五月講武場を城中に造る
安政四	一八五七	二高森	十月鶴屋城修補成る
万延元	一八六〇	〇	十一月佐伯藩三郎の舎屋成る、番頭開成美策復す。
文久三	一八六三	二高標	八月前館(天祥館)又、俗に南御殿といふ)の造営成る。
明治二	一八六九	〇	六月講候と共に封土を朝廷に帰す。

臣に賜り、養賢寺往職禮漢きして上祿文と
託して曰く、
空國の南に佐伯有り、泰山麓に坐す、高く
して大なるを鶴城と曰ふ、云々(段々及す)

(附記)・鶴藩歴史からの抜書である。何かの時に手引にされた事がある。
藩藩奉還で鶴屋城が国府となつた左は明治三年(一八七〇)と解したい。従つて佐伯鶴屋城の歴史は二百六十八年といふことになる。
(以上引張稿)

研究

佐伯の港はどんな働きをしてゐるか

主として木材の流通について

大分県立佐伯豊南高等学校校教諭

同校師士志々木 頼明

本会会員 市野 瀬

仁

第二章 佐伯港

第三節 その社会的環境(つづき)

四、佐伯港における臨海工業の動向

港に出入する大型貨物船舶、臨海にある工場と基盤として動いてゐる人が多い。工場は運搬された原料を木材、機械と労働力つて成品を生み出す魔術師のようになり、生きものである。その結果巨額の貨幣を生み出す反面、生物の命をおびやかす製造元ともなりうる場所である。十八世紀英国の産業の革命ともたがらして以来、世界は工業化の道と絶たさなかつたばかりでなく、益々高度化したために、二世紀を経た今日人類は超工業化、脱工業化の言葉と聞くようになった、それは公害の根本人としての悪魔の名の爲であるか。しかしそればかりから十私運の周辺に工場進出や工業誘致の声は絶たないのはどうしたことだろう。人間社会は常に問題と意識的に抱えておるか、希望をつなぎ、緊張と不安の中に生きてゐる複合体であると云える。

生産や営利を第一義とする工業は、輸送費節約の点から臨海にあることが最も経済的であるので、こぞつて位置し集積する。その上国際貿易によつてのみ成立してゐる日本産業界は、特別の業種を除いて臨海を好まない工業は極めて少ない。セメント工業のような重量のあるもの原料とする装置工業は、臨海に建設しようとして初めて場所がないと云われている。

港湾は一定の水域と陸域を含むとされてゐるものがあるが、沿岸地は繁華街の中心地に比すべく、工業界に於いては黄金の土地と云える。

この項では第一に臨海工業の分布について、第二は主要な工場の紹介と問題点、第三は海上輸送の特色と佐

佐伯港について述べてみようと思う。

(一) 佐伯臨海工業の分布について

佐伯港に臨む工場群を鳥瞰するに、佐伯高校の裏山に於ける濃霞山から見ると第一の候補地である。第二の候補地は国小田狭歩がよく登ったという、妙見山から見る景色である。しかしそれにまさるとは劣る。第三の候補地をご紹介しよう。それは大入島石間新港の上にある大正天皇駐蹕記念碑のある丘から見ると、先づ横に広がる佐伯港の大きさに驚き、リヤス式海岸に於ける工場群の陰影と、海、山、程よい調和美に酔う。

このような地点は、ものごとを両面から見ることを教えられ、縦に考へることの必要を説いてくれる場所だと思ふ。目撃しい工場と云へば、海精地区の方から、日本セメント、ニ平合板(海崎工場)、本田造船、ニ平合板本社と河向工場、佐伯造船所、興國人絹社の四種(マント、分板造船、映人)である。これら工場は分布状態とをつかむのに、戦前、戦中、戦後、現在と、節をつけて観察してみることによしよう。

1. 戦前の工業

四種の工業のうち造船所が最も古い歴史を持つ。妙見山下の葛や坂ノ浦附近は、その発祥地である。古くより渡海船や漁船の行き来のある海部ノ地であり、船材を伐り出す後背地があつた所にその理由がある。



また坂ノ浦地区は典型的なL字型の小湾からなり、本田造船の筆頭に、三浦、古川造船と関連工所の並ぶ工業地の特異な地域となつてゐる。

○本田造船
本田造船の社長本田壽太郎氏が第一工場を構へたのは大正十三年(二十四才)であつた。当時は、葛の町造船所、代後の吉野造船所、灘の金内造船所があり、百五十級級の造船メーカーとして名を知られてゐた。注文は下関、廣島、白根から多く、船材は弥生町の上野、切畑、佐伯市の堅田ノ村里に近い巨木を伐り出したものであつた。ここで働く船大工は海岸部周辺の人々が

大部分であつた。昭和二十七年より鋼材に変わり、今では水産維成の程度となつた。以前船技の供給地であつた弥生、堅田地区から、ここで働く従業員が非常に多いといふことはおもしろい現象である。また三百人の従業員の中、五十人の女子労働者が溶接工として、男子に負けぬ立派な仕事をして喜ばれていることは、時代の推移を示すものである。

注文先は沖徳、長崎、鹿児島、宮崎、福岡、山口、徳島、広島圏にわたり、多数にして二、五〇〇名級の時期にきたといふから隔世の感がある。また大資本の系列下にも入らず、組合も持たず、相当の設備投資をして健全経営を統括している会社は九州に珍らしい。四国の業者は完全に大資本の企業にかられたと社長は語つていた。七十才をすぎずして降頭指揮をしている本田壽太郎氏は、この土地が造船に最も適していることに自信を持つた言葉で語りながら、工場を案内して下さつた。

○日本セメント株式会社佐伯工場

佐伯工場として操業を始めたのは、昭和六すてに壯年期にあたる。他地域から企業の進出はこれが始めてで、佐伯地区に於いてこれほどの大企業は未だにない。歴史も古いし、工場群も静かで訪問しても気分を落ちつかせ、親和感を帯たせてくれる。すてに地域のものとなつた感じだ。子供も頃尺間山に登つて、眼下に見るセメント工場の煙突は肌裏に焼きついてなつかしい。野生の原石採掘場から、昭和三十五年まで野をこえ山をこえ頭上を這つていたケーブルの流氷や、汽車の窓から見る工場設置の移り変りを、佐伯の人はいつの間にか読みとつていゝに違ひない。

実はこの度の佐伯各種工場の由来を調査するに當つて、一齋期待して左巻庄の垣野内薫氏が急造されなつて、

私の希望は断られてしまつた。昨年喜港についてお伺ひしたさい、氏は特別にセメント工場の由来によくご存知のようであつた。私は、またの機会に詳しく聞こうといふ気があつたものだから、たいては記録してないものが今となって残念でならない。

その時の話によると、浅海井出身の菅根重夫氏が台湾の高雄で製糖業をしていた。後、東京神田の山内商工で日本セメント会社を台湾へ誘致して、彼自身も会社の専務に招かれたといふことであつた。へもし誤りがあつたら私の聞きちかいかと思ふ。

石灰石は始め蒲戸に目を付けて昭和十五年まで採掘した。野生より空中ケーブルで運ぶこと二十七年、潤滑した。以前より原石輸送が速くなりほしたものの、臨海に好位置は、日本セメントが持つ一〇工場の中で佐伯工場は秘蔵品の一つである云う。

以上戦前よりあつた工業は、坂ノ浦を含めて海濱地である。

口 戦 中 (戦前より戦中にかけて)

昭和九年に佐伯航空隊が開隊されて以来、佐伯の港は一変した。飛行場の建設、防備隊の設置、浚渫と埋立、コンクリートに固めた建物、道路、橋梁、港湾施設が建設され、文字通り軍事色に彩られた。これらの諸施設の中には、海軍官庁総合庁舎力できるまで使用されたものがかなりあつた。ずぶ濡れになつたように色褪せた三階建の旧兵舎は、いつまで保存するつもりであらうか。大蔵省と書いた白い立札が草叢から顔を出しているのが滑稽に見える。前庭に広がるグリーン芝生と、帯のように屏風のように朱色に輝く新鋼船の船腹とのコントラスト

が美しい。過去と現在が何合っている形だ。

番匠川のデルタの延長は、離小の一角を削り取り、海底の砂岩を埋め立てた広大な土地は、時勢に乗った軍の力だからこそできた仕事であつた。興人は勿論、ニ平合板会社も造船所も、軍部にかかりのある土地に進出した。「佐伯の港は良いが港湾施設が立ち遅れている」との声を、なまじ軍の遺物に時と間に合わせていたからでもあつた。鶴谷区にある木枝荷揚場にしても、造船所にしても、未だに大蔵省、運輸省の所屬になつており、不自由のまま残っている現状である。以来佐伯の地は海上自衛隊の分遣隊として、軍事色から縁の切れないうち土地柄となつた。真珠湾攻撃の直前、極秘の中に連合艦隊集結の舞台になつた程だから、軍事上にも注目すべき地形なのである。

戦時中工場として徹底的に協力させられたのは造船所であつた。金子堅太郎を総裁に産業設備営団が組織された船は戦時標準型で定められた。当時本田造船では二百五十級級の船を十一パイ建造した。最も多かつた時は六百人の労働者が准徴用といつた名目で働いていた。すべてをあげて國家の為に奉仕した本田壽太郎氏は表彰もされ、戦後二万坪の敷地を払下げてもらつた。坂ノ浦南部全敷地は、産業報國をしたための記念の土地でもある。

ハ、戦 後

○ニ平合板株式会社

昭和二十一年いち早く操業開始したニ平合板は、今や河向上場、海崎工場と愈々發展の一途をたどっている。操業間もない頃、私は工場を案内して説明を聞いたことをかすかに記憶している。左しか今の社長であつたろう、若く背の高い人であつた。その時の話に朝鮮から引

揚げて工場適地を探すと為、九州一円を巡つた中で、佐伯の地が一番条件がよいので決定したとのことであつた。第一海が深く、静かだ広い。原木も将来はアラスカ方面より運ぶことも考えられると話されたことが記憶にある。社長に面会した際、左しかがめて反うと思つてはいるが、未だに機会がない。多忙の中の田中常務と二時間ばかり話す機会を得た。原木輸送、貯木場、敷地、労働力の面から、佐伯の立地条件は日本一という言葉をかあつた。左しかにニ平合板は早く目をつけただけに、佐伯港の中心地に位置し、長島川を巧みに利用し、海陸の輸送幹線に近い利点を持つ。とくに合板会社にかかせない巨木の海上貯木場の広さと云わず、位置といわず、波の静かさといわず、全国にも珍らしい所だと察せられる。この広大な海上貯木場のスペースは、興人の広大な敷地に匹敵するもので、当工場の経営を支えている大事な要素であると思われる。陸上と違つて海上は他産業との船舶の接触や原材料（ラロン種）の保護や操作の上から、非常に困難と危険をはらんでいる。

○株式会社興人 佐伯支社

興人が佐伯の地に進出したのは昭和二十八年である。この経緯についてはご存知の方が多い。昭和十六年市制施行後約十年、工場を誘致して市庁舎を期しようとして考えられたものことである。会社側は広大な土地、香並川の水量、水量、港湾の立地条件、原木入手の位置等好都合で、交渉は問題なく成立したものであろう。当時

の市長矢野龍雄氏の政治的取引云々もよく聞く話であるが、公害と云起るなれは賞讃こそすれ、批評の声はおそらく聞かれないてゐる。

それはともかくとして、興人の特色を語るには、この広大な土地について述べなくてはならない。大体リヤヌ式海岸の平地は狭いのが普通である、それが香匠川デルタに延長して軍部が土地を埋立造成して飛行場を建設したものが、リヤヌ式海岸には珍らしい土地が出来た。

大入島の大正天皇駐蹕記念碑を走つ丘から見ても、航空写真を眺めても、また百三十五万五千平方米という斬違いの敷地の土地が、そつくりそのまゝ興人のものとなつてしまふかゝるたいしたものである。

そして、バルブ工業は、他の工業にくらべて最も工業用水を必要とする業種で、佐伯市は一日の上水量一六〇〇ト(六三〇のち)に対し、興人の使用量は五〇〇ト(三〇〇のち)多き上る。不幸にして現在興人は二つの水攻めにあつてゐる。

一は香匠川の水に限界が来たこと。それは伏流になり易い川自体の性質からくるものと、予想を上まゐる市内の水の需要量に起因する。

一は工業排水の処理である。私の研究は公害がテーマでないので、臨海工業の問題と坂下際とのことでさげしうと考へてゐた。所が興人の調査をすすめてゐる時は経済企画庁水質調査官が視察に来られ、水質保全海域指定の論議があつた時である。私の研究調査の進行上、先礼とは思つたがその検査の翌日興人と訪問することとなつた。遂に工場長には会えず、矢野総務課長と二時間ばかり話しかけ会を得た。

課長は「佐伯出身の職員しつかりせえと私は云つてい

るんです」と。内外共に苦勞も多いと思つた。ラッパズボンをはいて元氣のよかつた先輩の、佐伯中学時代を私は思い出しながら「意見を詳聴した。」

六月二十四日の日本経済新聞に掲載された、東京大学助教授岡本康雄氏の論文に次のような記事がある。

「企業内部の構成員自体が、一市民となつて企業とは何かを及ぶからに聞い、これに答える努力が絶対に進められるときである。」

また、「地域社会はいつのまにか企業を核として運命共同体に変容する。こうして企業対地域社会の市民といつた明確な関係がほかされ、産業公害を取り上げる主体が不明瞭になつていく。」

「日本の企業も工業が立地する地域社会に対し、他は協力金」といふはくとした形で支出を行なうことが多

と。公害は今や全国的な国民運動となつてきた。私達も日や枕難し合つてゐる時ではない。少しオーバに言ひ方をすれば、工場と市民の生命にかかつてゐる問題である。兩者共々にこれが解決に努力しなくてはならない。自然を侮辱してゐると必ず取りかえしのつかぬ怒りを人間が受けねばならないことは過去の歴史が示してゐる。

(注) 次号の(一)は各工場が公害にも若干なれ、問題と上つてゐる。もう一つは興人に於ては(二)の字号で述べた。

○佐伯造船所

佐伯造船所が操業を開始したのは昭和三十三年である。以来造船グリムに乗り、拡大の一途をたどつてきた。向

分港灣の立地條件に恵まれて本社の二倍以上の規模を持ち、一六万七級の鋼船を作り、年間六十億の売上げを見事に至っている。大正八年十二月、資本金五百万円をもつて株式会社を設立した田中豊吉氏の工場はここまで成長した。しかし休息は一刻も許されない。競争の激しい業界では、早く大型化、省力化の近代鋼船を送り出さねばならない。一時は敷地問題で工場の日出移転説も出たが、公害も少ない上に佐伯地域に種々の利益をもたらす工場とあつてふるとどまつている。ごく最近二万(三万も後)の建設にふさわしい敷地拡充も、市との交渉により濃霞山の一部借用という所までこぎつけ、新船台を設け置する運びとなつた。会社も昭和四十一年以来石川島重工業と業務提携し、磐石の構えを示している。

さきあげたように、造船業は佐伯臨海地の最も古い工業で、立地条件はよい。今後は大型化要求のため敷地の問題がおきてくるだろう。

新任早々の工場長には新たな決意と旺盛な意欲を感じさせられた。その抱負を尋ねると、「内には従業員の高給と仕事の効率化、外には地域社会との提携」と話されていた。私は、濃霞山は産業風土の面からも大切な山であるから、大事にしてもらいたいと注文をした。

二、現在

戦前、戦中、戦後に設置された四種の主工業も、日本経済の驚異的進展に伴つて、産業構造にも変化を来した。あるものは大資本の系列化に入り業務も技術提携をしたり、或るものは共同出資の形で企業合同したり、或るいは中小企業は下請や関連工場として主工場に集積したりしてきた。そしてとり工業ばかりでなく、商業も活動の場として臨海地に足場を作ろうとしている傾向

がばつかりとしてきた。高工業の新しい動きを具体的に示すと、次のようになる。

▽海濱地区

- 一、西上浦、狩生島島の埋立に木材輸入基地の建設。
- 二、佐伯合板会社(三井化学、日本火災海上保険の出資)八月に

完成予定

- 一、中島水産加工

▽佐伯地区

一、久米工業

- 一、佐伯木材団地(佐伯ハウス工業も含む)
- 二、フェリポート養着場建設(佐伯、宿毛間)

戦前、戦中、戦後の工場は、最早青年期から壮年期の域に入つていくものもある。しかし今から操業しようとする之等工業も商業の会社は、既設工業が歩いてきた工場のスイステムやテンポとは異つた経験とすることである。また佐伯臨海に並ぶ工業も、今進行中の諸企業を含めての分布図と業種別に色分けをしていくと、地域的に広範囲となり、バラエティに富んだものになつていくのに気がつくであろう。しかし長い目で将来を展望すると、この地域に適し、地域社会から歓迎され、定着する企業は自ずと決つてくるような気がする。つまりところ「経済の原則」と「人間の幸福」とのバランスを考へねばならない。それ故今後は、地理的条件の尊重と、公害の少ない企業という二原則を市民が守つて選択し、市政に反映しなくてはならない。